

がん治療に伴う外見の変化には、 カバーメイクで楽しみながら

医療界の産学連携を模索する「第38回産学連携メディカルフロンティアセミナー」が3月11日、東京大学医学部附属病院・22世紀医療センターの主催で開催された。その中で、同病院乳腺内分科特任臨床医の分田貴子さんから、がん患者さんの多くが悩む、治療にともなう外見の変化に対応する「カバーメイク」についての解説があった。

取材・文●「がんサポート」編集部



医師や看護師のほか、化粧品メーカーなど多くの関係者が参加したセミナー

患者さんを悩ます 外見の変化

外科手術後の傷あとや、抗がん薬の副作用による色素沈着など、がん治療にともなう外見の変化を気にする患者さんは多い。また、変化に対する対処として、メイクをするとしても、その手間なども、患者さんにとっては煩しい問題だ。

今回のセミナーで紹介されたカバーメイクとは、カバー効果の強いファンデーションを使って、簡単に肌の変化を目立たなくすることだという。

開発した分田貴子さんが、その経緯を語った。

3年半前、分田さんはワクチン治療試験を経験し、接種痕などが残る患者さんに、治療にともなう外見の変化に関して、本日はどう思っているかインタビュー調査を行った。

その結果は、「仕方がない」「せっかくな治療をしてもらっているのに、医師に文句のようなことは申し訳なくて言いにくい」という意見があったものの、日常生活を送るうえで、外見の変化をどうでもいいと思う人は少数派でした」という。

患者さんに 負担の少ない方法

それでも、新たな課題が生まれた。クリームそのものについてだ。患者さんからは、「クリームを塗るのがめんどう」だとか、「服についてしまう」「水に弱い」などといった意見が出たという。

そこで、持続性を高め、摩擦に強く、耐水性も向上させたいと、チューブ型にすることで肌に塗るステップを簡単にした。また、カラバリエーションも豊富にすることで、さまざまな



「メイクは患者さんが満足したら仕上がりです」と分田さん

肌悩みに対応できるよう改良したボディ用ファンデーションを開発した。

「がん患者さんがカバーメイクに求めることは、『きれい』かつ『負担が少ない』ことですが、とくに『負担が少ない』ことを望むのではないかと考えます。ワクチン治療の患者さんに限らず、がん患者さんに広く使っていただけるのではないかと」

患者さんの声を参考に開発された、カバー用クリームが完成した。もちろん、国の基準を満たした製品だ。

現在も分田さんは、同院の乳腺外科や胃・食道外科のがん患者さんを対象に、治療にともな

う肌の変化に、カバーメイクを行うことでQOLが変化するかを継続して調査している。

参加者には、カバーメイク前と2カ月間使った後に簡単なアンケートをとっている。肌色に合うカバー用クリームを無料提供しているという。

また、他科のがん患者さんやがん以外の患者さんに対して、カバーメイク相談も行っているそうだ。カバー用クリームは院内の売店や通信販売などでも売られている。

カバーメイクの産学連携

がん患者さんは、可能なときは趣味に熱中したり、外出をしたいと思っている。ただ、外見を気にしすぎるあまり、行動範



SCボディカバーファンデ全3色(各¥3,360税込)、専用クレンジングで落とす

囲を狭くし引きこもりがちになる。それは、治療の継続に影響するとともに、家族や周囲の人へも影響するため、メイクは大切になる。

分田さんは、「カバーメイクは、いくら素晴らしい理念や技術があっても、そこにクリームがなければなにもできません。その意味では、『産学連携』の『産』が大事になります。

カバーメイクの場合、それは化粧品メーカーとなります。ただ、化粧や美容とカバーメイクは異なるものだと考えます。化粧や美容はゼロまたはプラスをプラスにすることで、カバーメイクはマイナスをゼロにする



SCクリームファンデN全11色(顔用)(各¥2,415税込)

あるいはなんとかゼロに近づけようと努力することではないかと思えます。

「せめてこうしたい」という人にとって、『化粧品とはこういうものだ』とか『メイクとはこういうものです』、『美容学的にはこうだ』といった考え方は、実は窮屈なものでしかないかもしれないと、患者さんが本当に求めている物を提供できないのではないかと提言した。

さらに、「カバーメイクはゴールではありません。患者さんの全般的なQOLを高める道具の1つにすぎないと考えています。」

患者さんからは、「カバーメイクやウィッグ、補整下着などの商品購入や経験者による指導や情報提供が、院内1カ所ですきなものか」といったお話を聞きます。そういったこともできないのか、と考えています」とまとめた。